

64 「生涯教育 (学習)」の理念は、何故、敷衍 (共有) されないのか?!

堂本 彰夫

(1) 「生涯教育 (学習)」は「普遍 (理想?)」である! だから、様相は多種多様となる?! ならば、何が大切か?

先号 (63) では、自らが直接知り得た、近場の二つの事例を挙げ、その双方の取り組みには、現実的に大きな意義・可能性があり、是非そこから、望ましい、そして、実現可能な「教育協働」の姿・形を創り出して欲しい! そういうことを書いたつもりであるが、一方では、まだまだ課題 (困難?) が山積しているということでもあった?! その最大の理由が、そこに、「社会教育 (行政)」の積極的な関わりが見えない? 極論すれば、「ない?」「雲散霧消してしまっている?」、そういうことであったが、それでは、やはりうまくいかない? 本当に、それでよいのか? そういうことでもあった (ただし、直接の担当者には、そのような認識、危機意識はない?) ?!

しかしながら、よくよくその原因 (背景) を考えてみると、そこには、その柱となるべき「生涯教育 (学習)」の理念が、少なくとも制度 (行政) 的には敷衍 (共有化) されていないということがあがる?! 結論から言えば、「生涯教育 (学習)」の理念は、どこでも、何にでも通底する、つまり普遍的なものではあるが (いつでも、どこでも、誰でも学べる! そして、その成果が適切に評価される! →これは、理想とも言えるが、考え方としては究極であるとも言える!), それ故に、その実現の様相は多種多様にあるということになる (→何でも「生涯教育 (学習)」?) ?!

別言すれば、その取り組みが (意識しようとしまいと?)、「バラバラ (足並みが揃わない) ?」にもなり得るといふことであるが、だからこそ、そこで求められることは、目下必要と実感される、個々の具体的な取り組みの着実な進展なのである (理想には、一気に到達出来ない?) ! とは言え、そこには、残念ながら、実際は、まだまだ、その有効な方途 (戦略?) が見えていないということでもある (その意味で、教育基本法第3条「生涯学習の理念」が宙に浮いている? 否、泣いている?) ?!

しかるに、繰り返すように (くどいようだが?)、これまでの教育のしくみ (近代教育制度) は、一定の意義と役割を果たしてきたが (否、大いに、その成果を成した! →「近代化」の最大の功労者でもあった?)、時代状況の推移とともに、その強み・メリットが、弱み・デメリットの方へと動き始めてきた (もちろん、国によって、地域によって、その実態は、かなり異なるが!) ?!

言わば、その「矛盾」(学歴社会の弊害/役割過多) や「限界」(社会変化への対応不全/制度疲労) が露見してきたということであるが、その打開の方策として、「過度の学校中心主義」を改め、「いつでも、どこでも、誰でもが学べる」ような「生涯学習体系」へと移行するということが目指されてきた! その鍵概念が、まさしく「タテの統合/ヨコの統合」という、「時間的な連続」と「空間的な拡張」の主張であったわけである!

ただし、厳密には、その体系構築にあたっては、前者が「目的論」、後者が「方法論」となることは明らかであり (一人ひとりの、生涯に亘る学習の支援となると、そういう構図となる!), 私は、そのための「方法論」を戦略化 (可視化?) するために、「フォーマル教育 (学校教育を典型とする)」「ノンフォーマル教育 (社会教育を典型とする)」「インフォーマル教育 (家庭教育を典型とする)」の、言わば「教育 (形態) の三層構造」(もちろん、その基盤となる「偶発的学習」も組み入れ!) の存在と、その関係のあり方を提示してきた!

要は、それらの教育 (形態) の有機的な関係づくり (連携・協力) によって、生涯教育 (学習) の理念は実現されるとしたのである! そして、とりわけ、社会制度 (法制度によって運用されるしくみ) としての「フォーマル教育 (学校教育)」と「ノンフォーマル教育 (社会教育)」の、より緊密な連携・協力 (→学社連携・融合) が、その有力な方途であり、必須の施策としてきたのである (ちなみに、私からすれば、多少 (かなり?) 遅きに失した感もあるが、近年の「地域学校協働活動」とか、「総合教育政策 (化)」の動きは、まさに、その一つの大きな姿・形とも言える?!) !

(2) 「教育 (ひとづくり)」と「地域づくり (まちづくり)」の往還 (循環) 関係が、すべてを決する?!

とは言え、現実の動きとしては (特に地方において!), そのような方途・施策は、なかなかうまく具現化され得ず、諸状況の変化 (予算的な逼迫等も含め) によって、かなりの停滞・変質 (後退?) を余儀なくされているようにも思われる (とりわけ、「生涯教育 (学習)」の旗振り役であった「社会教育 (行政)」の分野が!) ! 否、捉え方によっては、「地域づくり (まちづくり)」に、その主眼を置いていた社会教育 (行政) であったがために、折角、「CS」や「地域学校協働本部事業」のような、現実的に実感できる有効な施策・事業が展開され始めているにも拘わらず、その意義・役割を分散化 (二極分化→股裂き?) させられているとも言えるのである?!

ということで、そこにおいて、残された (戦線縮小された?) 教育行政 (教育委員会) が、どのような役割、布陣となるのか (学校教育行政に特化? →弱体化する?), かなり心配な部分もあるが、とにかく、新たな対応のしくみを模索しなければいけないということは、火を見るよりも明らかなのである (こうした中で、例えば岐阜県のように、「地域学校協働活動」の位置づけ、施策が首長部局の主管となり、社会教育 (行政) は、そこに移行させ、しかも、その中心となって先導していこうというスタンスを創ったところもある!) ?!

ところで、よく、「教育 (ひとづくり)」と「地域づくり (まちづくり)」は往還 (循環) するとか言われる (私も、

そのことを声高く主張してきた→「ひとづくりとまちづくりの循環構造図(愛称「曼荼羅図」)」!教育が社会(地域)をつくり、社会(地域)が人をつくるということであるが(過度な学校教育中心では、そのことが見えない?忘れられてしまう?→これまでの「教育課程の変遷」「学力論争?」等を見よ!),教育と社会(地域)は密接につながっているのであり(と言うより、人間/子どもは、社会(地域)との関わりの中で人間/大人となる!これは、紛れもない真実である!だから、怖いのもあるが?),それに(再?)注目すると、『教育(ひとづくり)』と『地域づくり(まちづくり)』は往還(循環)する」ということが、改めてクローズアップされてくる!

そして、そこで大切なのは、その双方の成果を有機的に繋げたり、そこでの関係を促進・媒介したりする人や機関(専門的スタッフ)の存在である!「文明化・都市化された社会」では、とりわけ、そうした仲介的・調整的な機能を果たす人や機関が必要となる!各種のコーディネーターやネットワークの存在は(名称は、それぞれ多種多様であるが!),その証左でもある(今回の「コロナ禍」においても、そのことは痛切に感じられる?)!

ということは、近年、学校教育の方でも、「開かれた学校」とか言われ、最近年では、ついに?「社会に開かれた教育課程」とかとも言われ始めたが、ある意味、学校(教育)は、本来?そういう教育の場であるとも言えるのである?!しかしながら、そこに、絶対に忘れてはならないことは、ただそれだけ(掛け声や会議体の設置等)ではうまくいかない?逆に、忙しさや煩雑さが表面的には顕著となり、その良さや成果も、なかなか実感出来難いものになってしまう恐れも、十二分にあるということである?!何故なら、そこに、何のための施策かが十分に咀嚼されないまま、導入が図られているかもしれないからである?

(3)改めて、その「普遍性」は、どのような形で担保(実現)され得るのか?!案外、瓢箪から駒かも?!

すなわち、新たな制度の導入とは、これまでは、往々にして、そうした混乱(反発?)や齟齬を生じさせるものではあったが、これらの取り組みやしきみづくりが、「生涯教育(学習)」のしきみづくりの一環でもあり、それがまた、「教育(ひとづくり)」と「地域づくり(まちづくり)」の往還(循環)を活性化(蘇生?→絆づくり)させるものでもあるということが分かれば、より前向きな姿勢や取り組みの方向性も、自ら見えてくるものとなる?!それ故に、ここで「生涯教育(学習)」の理念を持ち出すのは、決して我田引水ではなく、これからの「教育協働→総合教育政策」にとっては、重要な指針とならなければならないということなのである!

翻って、前回も触れたように、近年の、ユネスコの、「生涯教育(学習)」の推進の方向性は、例の「SDGs」(持続可能な発展のための政策目標)の設定と、そのための「SLC(持続可能な学習都市)」の推進にあり、その方途として、学校教育のような「フォーマル教育」と社会教育のような「ノンフォーマル教育」の一体的な推進を、その基本的な枠組みとしている?!それは、おそらく、我が国の「総合教育政策」と軌を一にするものと見なすこともできるが、その中で、社会教育(行政)が、どのような姿・形で、それに関わっていくのか?

私とすれば、そこが、個人的には大いに関心がある(危惧している?)わけであるが、とにかく、「総合教育政策→教育協働」にとっては、一方の社会教育(行政)が、教育行政の中で雲散霧消したり、一般行政の方に移行し、その中に、単純に包摂されたりすることは、理想的にはともかく(理念自体は、そこまではカバーしていない?)、実践的には、まったく好ましいことではないということである?!

一方、そんな中で、徐々に、今般のコロナ禍による、学校での、子ども達の学習の量への危惧・懸念が表明され始めている!休校が続く、予定されている教育課程の履修が出来ないということが、その原因であることは言うまでもないが、その不安や批判の矛先が、教育行政や学校(だけ?)に向けられている?!月二回の土曜授業を始めたところもあるが、その責任や負担を、学校・教師だけに押し付けているようにも思える?そして、他方では、義務ではない社会教育(行政)の施設や事業には、利用者はほとんどいない(行けない!)のである?!子ども達への学習支援(教育)が、学校・教師の責務であることは言うまでもないが、そこに、過度の学校中心主義が、相変わらず蔓延しているとも言えるのである?!

他にどうしようもないということであろうが、今こそ、学校教育と社会教育の協力が必要である!もちろん、そこに必要なのは、どういう学習が、どれくらい必要なのかという情報共有であるが、オンライン授業とか、双方向の授業づくりが、一方で喧伝されていても、すべてが、学校教育関係者への指令であったり、要望であったりする!折角、近年盛り上がりを見せてきた「地域学校協働活動」(CSや地域学校協働本部事業等)ではあるが、新型コロナ禍によって、まさしく「水が差された」状態にもなっている?!

だが、捉えようによっては、今がチャンスとも言える?分散学習ということも含めて、オンライン学習のコンテンツ提供や学習プログラムの合同制作・実施等を、公民館や青少年教育施設等と協働して行うなどしたら、一挙両得にもなる?始めるに当たっては、さまざまな阻害条件や過度の負担があるとは思われるが、実は、それは、単なる「コロナ禍」対応に終わるものではない!否、むしろ、それ以降の、まさしく「地域学校協働活動→教育協働」のインフラ整備?ともなるのである?!端的に、発想の転換が求められるということであるが、繰り返すように、「いつでも、どこでも、誰でも学べる、そして、その成果が適切に評価される社会」の実現は、そのような、目の前の、現実的な問題・課題解決のプロセスに、その大きな契機があるとも言えるのである!決して、果てしの無い、理想社会の産物ではないのである!案外、「瓢箪から駒が出る」かもしれないのである?!